

柏樹

会長 南 勇
川口市退職校長会 会報 第30号
令和7年2月1日

仲間と共に 生涯学習

安部 八千代



こんなに素晴らしい学習の場があったとは…

早速夫と一緒にパソコン教室に申し込んだ。70の手習いだった。

夫は教室に通い始めてからパソコンに生きがいを見出したようで、旅行から帰ると写真をパソコンに取り込み、旅行記をぽつぽつと打ち「僕が生きている証拠」と言っっては、友人たちに送付していた。

あれから10年、歩行が困難になった夫は、今は週4日デイサービスに通っている。

私はパソコンに加えて写真教室、絵手紙教室にも通い、多くの仲間と学生生活を楽しんでいる。
シルバー大学では区内60才以上の

学生が学び、健康長寿で生きがいのある生活を送っている。36教室の学びの場は、

区長をはじめ関係団体の支援・協力で確保されている。

令和5年度の閉講・卒業式では、約700名の学生のうち在学5年、10年、20年、計70名が表彰された。

私は10年生を代表して謝辞を述べた。日ごとに温かさを増し春がやって参りました。

早いもので入学しましてからいつの間にか十年がたちました。

今年度は、シルバー大学閉講四十周年の様々な記念行事に参加して、充実した一年を過ごしました。

いろいろな教室で学習ができるのも、沢山の方々と交流ができるのも、シルバー大学という組織を作り、維持して来られた理事長さんをはじめとする諸先生方のお陰です。

心から感謝申し上げます。これからもよろしくお願いいたします。

本日は奨励賞を戴き有難う御座いました。

令和六年三月十八日

荒川シルバー大学 十年生二十三名

代表 四班 安部 八千代

新たな「学びの場」

加藤 祐子



定年退職後、川口市立教育研究所で相談員を5年間務め、一区切と思っていた今年3月末、

思いがけず「川口市立子ども発達相談センター」勤務のお誘いをいただき、今年も引き続き相談員として働くことになりました。

「子ども発達相談センター」は市の「子育て相談課」に所属し、令和2年度に立ち上がった新しい組織です。保護者の心配や悩みに電話・来所・訪問相談等で「つながる」、幼稚園や保育所への巡回訪問や小学校への一年生訪問、保育士や教員への研修会を実施して「ささえる」、学校、幼稚園、保育所は

もちろん、教育委員会や市の障害福祉課、医療機関等との連携を「ひろげる」を目指し「るるる」という愛称で呼ばれています。青木環境センター隣の「青木3丁目分庁舎」2階にあり、毎日出勤すると幼児の元気よくはしゃぐ声や笑う声、大泣きする声に交じって、職員やお母さんたちの一緒に遊ぶ声やな

だめる声が、耳に飛び込んできます。

職場には福祉が専門（ケースワーカー）等、福祉関係の資格をもつ）の行政職、私のような教職、保健師、保育士、心理士、言語聴覚士及び作業療法士、発達を専門とする小児科医が、常勤・非常勤として勤務しています。

このように多くの職種の人達が所属している「るるる」は、市の組織の中でもとても珍しい部署だと思います。

働き始めて半年以上たち、長年学校教育の場に身を置いてきた私にとって「るるる」での毎日は、とても新鮮に感じます。「学校教育」は基本的に時間的制約（教育計画は1年単位、修了年限＝義務教育9年間）があるため、

その中で一定の成果を上げる必要があります。教員が、子ども達を何とかしたいという焦りから、トラブルになる所以でもあります。

しかし「福祉」は、生きづらさを感じている環境をよりよくすることを目指しており、期限はありません。一人ひとりゴールも違います。人によってはそれこそ、生まれる前から成人後まで何らかの形で関わっている例もあるようです。

改めて、「人を育てる」ことの素晴らしさを実感する今日この頃です。

——ちよつとくい話——

印象に残った三つ

土橋 仁

自分が校長となり印象に残ったことを三つ記させていただきます。

一つ目は、宮崎市との文化交流会についてです。

文化交流の理由は、勤務校の地域に江戸幕府の儒学者「安井息軒」が明治維新の混乱を避けて疎開をしていたからです。

宮崎市の子ども達が来校する日は、新聞社の記者が取材に來たり、夕方のニュースで放映するために、ケーブルTVのカメラが入ったりしました。「息軒」先生の疎開の様子などを話している時にTVカメラを向けられ、緊張しながら対応したことを思い出します。二つ目は、令和元年台風19号が関東地方を直撃し、学校が避難所になったことです。

地域の方々が避難して来る前に、地域防災部の方々と教職員で、防災倉庫にある毛布・乾パン・水の入ったペットボトルの配布準備をしたり、校舎の窓ガラスを保護するために、養生テープを貼りに回ったりしました。また、避難して来る方々の避難通路の導線を確認したり、家族構成に応じた場所割

りや乳幼児室の確認をしたりしました。夜になっても風雨の激しさは弱まらず、避難して来た方々も300人以上となり、体育館・プレイルーム・学習転用教室は、ほぼ満室の状態となつてしまいました。その日は、新芝川の土手が決壊して洪水にならないことを願い一晚を過ごしました。

一夜明け、幸い洪水になることはなく、地域の方々が無事に帰宅する様子を見送りながら、胸を撫で下ろしたことを思い出します。

三つ目は、文化会館で歌を歌ったことです。自分が着任した勤務校の地区には、芸能祭という行事があります。地区の方々が文化会館に一堂に会して、歌や踊りを披露します。校長もカラオケで出演することが決まっています。

まさか、自分が文化会館の広い舞台上でスポットライトを浴び、客席の何百人という地区の方々を前にして歌を歌うことになるとは思っていませんでした。立场上、大勢の方々に代表

挨拶などで話することはあっても、歌を歌うのはやはり勝手が違い、とても緊張しながら歌い切ったことを覚えていきます。

校長となり「待ったなし」。とにかく「判断」と「準備」の連続でした。その中でも、とても印象に残った三つについて、記させていただきました。

城を巡る

中山 明広

「いつかは日本中を旅してみたい。」とずっとそんな思いを抱いてきました。

子どもの頃の家族で行った温泉旅行。いとこ達との海水浴。遠足前の眠れない夜。旅にはいつもドキドキとワクワクがありました。旅好きの原点はそんなところにあつたのかもしれない。大人になって、バイクを駆って北海道一周や東北一周に挑戦したこともあり、キャンプやスキーなど、子どもの成長とともに、旅の形も変わっていききました。

50歳を過ぎた頃、出会った先輩の校長先生に「人生長いだから、退職したあとも続けられる趣味をもった方がいい。」と言われました。その方の校長室には雲海に浮かぶ竹田城（兵庫県朝来市）の写真が飾ってありました。日本百名城を巡る旅を始めたのはそれからです。

最初に訪れたのは、武田信玄ゆかりの武田神社（躑躅ヶ崎館跡）。中学生の頃、『風林火山』（井上靖）を読んで最初に好きになった戦国武将ゆかりの地です。それから10年余り。毎年、少しずつ各地の城を訪れ、この原稿を書いている時点で巡った数は89城となりました。

一人で行ったり、夫婦で行ったり、家族旅行のついでだったり。下調べ、計画の段階から旅の楽しみは始まります。城がある場所は、眺望の素晴らしさに加え、桜の名所であることが多いです。有名な庭園や温泉地が付近に存在し、和菓子や郷土料理など昔からの食べ物、さらに日本酒のおいしいところも沢山あります。歴史ある伝統行事や祭りを行っている所も多く、城巡りの楽しみ方は様々です。

見る角度や時季により様々な表情を見せる城の雄姿。地形を活かした特色ある縄張り。創意に満ちた天守や石垣などの建造物。山中に石垣の一部だけを残す儂い城跡と出会うこともあります。地域の人々から愛され、大切にされてきた城や城下町では、趣のある懐かしい風情を感じることが出来ます。城を特集する番組や書籍も増え、子ども連れの登城者や外国人の姿もよく見るようになりました。親子で枳形や狭間、石落としなど防御のための工夫や石垣の種類などについて会話をしている姿に出会うことも多くなりました。みな往時を想像しながら城巡りを楽しんでいくようです。

第一目標は65歳までに百名城を達成すること。百城目の節目は竹田城にしようと思っています。その時、雲海に浮かぶ竹田城に出会うことができるかどうか、今から楽しみです。

☆ 日々雑感 ☆

言葉から見える未来

伊藤 政久

「夕立が来そうな空模様だね。」
「何、夕立って、先生。」

今年受け持っている初任者の学級での一場面の会話です。今の子ども達には、ゲリラ豪雨と言った方が意味が通じるようです。そもそもその呼び名の方が的を得ている気象とも言えますが。

それにしても寂しいような悲しいような気持ちになるのは私だけででしょうか。以前、初任者との会話で「キムタクのドラマで」に対して「誰？キムタクって」と話を通じなかつたり、「とつくりのセーター」が通じなかつたりもした時がありました。そこに「住び寂び」を感じることはありませんでした。流行り言葉のように時代を反映した人物や物などは、今までも日本語から消えていったことが山ほどあるからです。

しかし、「夕立」は別格の日本語だと思っていたので、今の小学生に意味が通じないことに悲しさを感じました。小説の中でもこの言葉が出てきた時にどこか、情緒を感じ、情景と共に夕立の中の往來の人物の様子も会話も聞こえてくるのです。それがこれからの時代は「ゲリラ豪雨」という言葉で表現されるので

す。地球沸騰化の時代に合わせた気象現象だからと言えそうですが、台風は「ハリケーン」、日本の四季は「二季」と呼ばれる時代に生きるこれからの子ども達の感性はどうなってしまうのでしょうか。

そういえば、道徳の担任所見欄でのことを思い出しました。そこには「社会主義のすばらしさがわかりました。」と、道徳的価値が書かれており、学年互審から最後の私の所まで訂正されずに通知表が回ってきました。なぜ誰もおかしいことと気が付かなかつたのか、その時はわかりませんでした。改めて考えますと言葉を知らないから、社会主義も社会正義も混同しているのです。11月のアメリカ大統領選挙の話題から初任者と話をしていた時、「アメリカは民主主義なの？」と聞いたところ「エッ」と答えて詰まったので、周りの若手にも聞きまわると社会主義も民主主義の国も自信のない返事ばかりで、もう彼らは使わない言葉なのです。

国語の「こんぎつね」や「ちいちゃんのかげおくり」、「ぼくは川・阪田寛夫作」など、語句の意味を知らない初任者の先生が教えることは、言葉が時代ごとに変化していく中では仕方ないことだし、後はしっかりと教材研究し授業をしてもらうことしかないです。

夕立を知らない子ども達の未来は、仕方がないで済まされるのでしょうか。

マスコットキャラクターづくり

加田 明

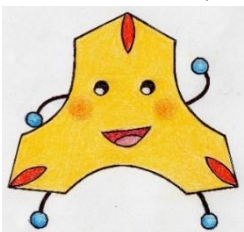
管理職として初めて赴任した元郷小学校には、子どもが作った「モトちゃん」というマスコットキャラクターがありました。しかし、あまり活用されていなかったようで、子ども達にも浸透していない現状がありました。

もともと美術の教員で、絵を描いたりものを作ったりすることが好きな私は、「このキャラクターを使って何かできないかな」と思ったのがきっかけでした。イラストで描かれたこのキャラクターを「立体にしたら面白いかも知れない」と思い、10cmくらいの小さな人形を作って学校の受付に置いてみました。それが意外と評判だったので、今度は1mくらいの人形を発泡スチロールで作って、職員玄関前に置いてみました。それからというもの、様々なパターンのキャラクターのイラストを作り学校だよりや掲示物に使ったり、人形をいろいろな場所に置いて写真に撮り、それをポストカードにしたり、缶バッジ、カレンダーなどを作り、子ども達や保護者、地域の方々に配ったりしました。Tシャツをつくった時は、子ども達や保護者が何ともほほえましい光景でした。保護者の評判も

上々で、バザーなどでモトちゃんグッズを作り、販売してくださいました。PTA副会長さんやPTA役員の方々が手作りしてくるまで作ってくださり、運動会や音楽会などの行事で活躍し「モトちゃん集会」なるものまで行われるようになりました。いつのまにか「モトちゃん」は、子ども達や保護者・地域の方々に愛されるキャラクターとなりました。たかがマスコットキャラクターですが、学校に関わる方々を笑顔にし、みんなの心を一つに繋いでくれる大切な存在となりました。

それからというもの、学校を移動するたびにキャラクターづくりを継続して行ってきました。戸塚西中学校の「たいさん」、原町小学校の「はらまっち」、舟戸小学校の「ふなとん」。毎月一体ずつその季節に合わせた装いのキャラクターを作り、子ども達の昇降口に飾るようにしてきました。

昨年、元郷小学校の150周年記念式典があり、校舎の前にステンレス製の「モトちゃん」のモニュメントを作ってくださいました。何ともうれしい話です。卒業した子ども達にとつて、学校の思い出とともにいつまでも記憶に残るキャラクターになつてくれたような気がしました。



教育情報

教職員、生徒、地域がみんなで協力して災害から「命を守り抜く学校」に

川口市立芝中学校
校長 荻上 晃司

1 はじめに

本校は、令和元年の台風19号における避難所開設に伴い、市内中学校では最多となる355名の避難者の受け入れを行った。幸いにして、生徒をはじめ地域住民の命に関わる事態とはならなかったものの、高台にある本校は、生徒の安全とともに、地域住民の安全を守る防災拠点としての役割を担っていることに気づかされた。

そこで、令和4・5年度に川口市教育委員会の「防災教育」に関する研究委嘱を受け、2年間にわたって研究に取り組んだ。

2 研究主題

「地域の防災拠点としての学校を目指して」生徒の自助・共助の力の育成と地域との協働体制づくり」

※自助：災害からまず自分の命を守る力

※共助：周りの人の命や心を守るために、いま自分がすべきことは何かを考え、行動できる力

3 研究の実践

(1) 研究構想

① 仮説

○「防災実動訓練」や「防災リーダー講習会」などの体験活動を通して、生徒の自助・共助の力を高め、地域と協働する場面を意図的につくることで、地域を守る（地域に貢献できる）資質・能力を備えた生徒を育成できるであろう。

② 手立て

○ハザードマップ作製、避難所運営ゲーム（HUG）などの防災に関連した授業実践
や、余震や傷病者を想定した「実動訓練（実践に近い防災訓練）」を実施し、生徒の自助・共助の意識を高め、自ら考え行動する生徒の育成を目指した。

○毎年、1学年を対象に講師を招いて「防災リーダー講習会」を実施し、避難所開設時に貢献できるような防災に関する知識・技能を高め、地域を守る一員として自覚ある生徒の育成を目指した。



○生徒会と各町会の防災担当の方々が防災について話し合う「防災サミット」や「本校主催の地域合同防災訓練」、「町会主催の防災訓練」などの地域連携事業を通して、地域との連携・協働体制を強化し、地域の防災拠点として機能する学校を目指した。

(2) 研究組織の実践

① 授業研究部

○「防災訓練」の計画・運営
○慶応義塾大学との連携・調整

② 地域協働活動部

○「防災リーダー講習会」、「防災サミット」、「本校主催の地域合同防災訓練」の計画・運営

③ 資料調査部

○防災に関する情報収集
○2年間にわたる生徒の意識調査の実施・結果分析

4 研究の成果と課題

(1) 成果

○「防災実動訓練」や「防災リーダー講習会」などの体験活動を通して、自助と共助の力を高めることができた。

○「防災サミット」や「本校主催の地域合同防災訓練」、「各町会主催



の防災訓練」などの地域連携事業を通して、地域と顔の見える関係を構築し地域との連携・協働体制を強化することができた。
○ハザードマップ作製やHUGなどの防災に関連した授業実践を通して、防災意識（災害の知識）を高めることができた。

(2) 課題

○地域に貢献する意識は高いが、避難所が開設された際に具体的な行動がわからない生徒も多い。防災意識や共助の力については、より高めていく必要がある。
○地域の防災力向上のために、生徒が学んだことを地域や家庭に伝えていきたい。

編集後記

会報「柏樹」第30号をお届けします。玉稿を賜りました皆様に、心より感謝申し上げます。

各クラブ活動の活性化に伴い、HPの内容も充実してきました。皆様にはぜひご覧の上、活動への積極的な参加をお願いします。昨夏逝去された前編集長、林俊幸先生に感謝申し上げますとともに、先生の遺志を受け継ぎ、今後も充実した紙面づくりに努めてまいります。(滝澤榮則)



川口市退職校長会ホームページ
<https://kawaguti-taishoku-koutyou.com>
※QR・URLからぜひともご覧ください。